

●小樽便り

のは、本科一年二組ですが、大層大人らしく、教師が近づきますと、戦々兢兢といふ態度で、これ等の點は改めさせねばならぬ處でございます。私は此生徒に對して自分が凡ての權能を與へられたるを感ずると同時に、其の知徳の貧しいのに想到して、戰慄を禁じ得ぬのでございます。しかしそれについては「教師はよろしく生徒の面前に披瀝するものゝ十倍の蘊蓄なかるべからず」と云ふことにおもひ到る時は中々近き將來に望み得ないことながら、教ふるこそそのものに就いてはできるだけ研究して多少確信をもつて教室にのぞみつゝ愉快に鞭を執つて居ますがどうしても「我れは彼等の模範たる者である」といふ勇氣自信のない處のもの、それは道德修養の一つでございます。(下略)

右は在三原女子師範學校の贊助員筒井たか氏の客員千葉安良に送られし私信の一節なり。筒井氏の許可を請うて掲げたり。

(上略) 小樽は船舶の多きほどに書物のなきところ候。御融通つき候節は御配慮下され度候。私は一年生の主任にて、國語、地理、作文、修身、作法、三年の地理をうけもち居り候。文科會には御差し支へのなき限り出席して上げて下されたく、又相談相手になつて上げて下されたく、又時々心配して上げて下されたく願ひ上げ候。部長は下村先生にお代りの由。前にいろゝとありしことを思へば、前部長下田先生には、文科會々誌を産み出した幹事として私は本當に感謝致し居り候。其の後文科會につきて何か御話これあり候や。伺ひ上げ候。

北海道の歌はあまりにみすばらしくて、自分ながら、よみたくなり申候。然し毎日新らしい經驗ばかりにて、私をそゝり申候ふもの絶えず候。

やわらかき二葉に抱かれ幸多き
明日を夢みるすい蘭の花。(鈴蘭に添て)

●前號正誤

頁	行	正	誤
七十三	二	おん咳の	たん咳の
九十三	下九	釋詰	釋詰
九十九	上十六	商權	商權
同	下十三	王通	手通
同	同十六	薛瑄	薛瑄
一〇〇	上十二	纂詰	纂詰
同	下三	李昉	李昉
同	同八	明透	明透
同	同二	古文典刑	古文典型
同	同二三	國朝二十四家文抄	國朝二十家文抄

以上は在小樽高等女學校の贊助員河崎なつ氏より客員千葉安良に送られし私信の一節を。河崎氏に許可を請ひて掲げしものなり。

此度下村先生よりの御話にて。本誌の編輯の一部を御手つだひ致すことと相成り申し此の原稿も認め申候。御言葉確かに拜承、できる丈けは成を守りてますゝこれを榮えしむることにつくすべく候。但し微力の及ばぬ處は幾重にも御許し下され度候。

千葉安良

